大阪府立北野高校（現代）/ 在籍当時の面影は時代と共に変貌を遂げています

昼間の仕事を終わるのを待って電車で行き帰えりした日々、夜10時過ぎに寮に戻って食べる冷えた夕食、疲れてどうしても打勝てなかった睡魔、おだてられて力の限り走った運動会、恋愛、失恋、入浴代がなくて忍び込んだ学校のプール、アルバイトで昼間制の職員室でのお茶汲みや真黒になった輸転謄写機の仕事、昼間に勉強している生徒をどれほど羨ましく思えたことか。今、思い出してもはっきり当時の数々が呼び覚まされ、胸が熱くなってきます。この北野高校で学べた誇りは私の掛け替えの無い財産といえます。地方から集まった境遇を同じくする多くの仲間。彼らから真剣に生きる術を学んだ気がします。さらに教壇に立つ先生は個性に溢れる魅力ある教師ばかりでした。逸材、森のごとしと映りました。
大多数の先生方は年配ながら大学院、研究生の学生で夜、生活のため教員をしている方ばかりでした。
ほとんどが現在、大学の教官になっておられます。どの先生を取っても私は憧れの的でした。大学に行く決心を本物にさせてくれたのは、これらの先生方に接した産物とはっきり言えます。4年生(夜間は4年間必要)の時、進学クラスに入り、会社を止めて少しでも勉強の時間を作ることに専念しました。隠れて貰った失業保険。小学生の家庭教師がきっかけで下宿、居候の身となり家族同様に生活の支援をいただいた韓国の方。
幸いにして昭和39年岩手大学農学部に進学出来ました。

岩手大学 農学部
農業教育資料館

https://www.osaka-c.ed.jp/kitano/ , https://www.iwate-u.ac.jp/campus/index.html より写真引用

◆大学での失望

大家蓄や農学が好きで進んだ道とはお世辞にも言えず、入学したものの悩みの連続でした。相変わらず生活費稼ぎのアルバイトの縁は切れず、多種多様な職業を経験しました。
今、思い出しても私の大学時代は心を揺さぶられる感受性を失していたのか、当時を偲ぶ鮮明な記憶は乏しい。ただ博士号を取りたいという気持ちは有りました。従って大学院に進むつもりで就職活動など何一つ準備していませんでした。
卒業間近になって、群大医学部産婦人科の五十嵐正雄教授(当時助教授)の所で動物実験助手を探しているが適任者はいないかということで、私が希望して卒業した春、群大に来ました(昭和43年)。目的は大学院に行く代りに働きながら学位を得ようと内心決めていたことは事実です。勤めながら研究していた高校時代の先生方を見ていたからです。

盛岡市内を流れる北上川と岩手山（南部片富士/標高２０３８ｍ）

https://ja.wikipedia.org/wiki/岩手山　より写真引用

◆失意と再出発

農学部の眼から視る医学部の異なる世界、あらゆる面に格段の差を感じ狼狽することばかりでした。いろいろ悩んだ末、ついに医学部の勤務も止めることに決心し、産婦人科医局で知り合った現在の病院長の所で働くことにしました(昭46年)。
病院で働く以上、何らかの資格が必要でメディカルセンターの専門学院に通学し検査技師になることを考え、昼間勤務して夜3年間通いました。ここで群馬県衛生研究所(衛研)の原田 賢治、中嶋 隆、両先生と知り会い、細菌学の手ほどきを受けました。
他に血清学の講義を受けた亀田先生も群馬大学の微生物教室で学位を得られたと聞くにおよんで、私も専門学院の卒業を待って微生物教室(当時、三橋進教授)の専攻生にさせてもらいました(昭50年)。原田先生が定年退職されるまで、夜、ご指導を受けるため衛研に通いました。
手始めに薬剤耐性プラスミドの分離から始めましたが、本を読んでもなかなか理解し難く、己の頭の悪さを嘆いたものです。しかし、誰も到達している目標であり、自分も必ず出来ると信じていました。
原田先生より衛研に就織しないかとお誘い戴きましたがお断りして、先生が退職された後、丁度アメリカから帰国された井上助教授の指導を受けるよう話しがあり、夜は引き続き群大の方に通うことにしました。

プラスミド

“プラスミド (plasmid) は細胞内で複製され、娘細胞に分配される染色体以外のDNA分子の総称。1952年にジョシュア・レーダーバーグによって提案された。”

（フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』より）

https://www.med.gunma-u.ac.jp/admissions/ より写真引用

◆分子生物学の波

勤務先の病院（佐藤病院/高崎）で数年間かかり膀胱炎患者さんより採取した分離菌からプラスミドを分離し、それをまとめて邦文の処女論文を書きました。人の物真似もいいところです(昭56年)。
やがてプラスミドもDNAレベルで論ずる時代に入り、疫学的な仕事だけではどうしても見劣りがしてなりません。だからと言って人目を引くような事はとても実力からして出来ませんでした。しかし、三橋・原田両先生から自分のルーチンワークの中にこそ良い仕事は発見されるものだとよく聞かされていましたので、尿酪感染症より分離したプラスミドの伝達と新しい薬剤耐性型を見つけてその酵素作用等を調べた英文の論文を書きました(1983年)。この頃からもう夜といわず日曜日は研究室に行くものと決めていました。共著論文は他に数編ありましたが、三橋教授の退官までに目的(学位取得)を達することが出来ず、大変先行心細く思いました。
毎日、毎夜、大学に通っても通っても実験の結果はうまく出るとは限らず、夜中疲れた身に“学位取るまでは”、“学位取るまでは”と鞭打って鼓舞していたのも事実です。夕食が10時、11時となることが常識となりました。

◆遠くに感ずる博士号

英語と独語の語学試験は合格できたものの、独語の感覚を呼び戻すためにテレビの初級番組を見たり、短かい基本構文を何度も何度も読み直して、人の数倍努力を費したような気がします。“痩せ馬に鞭”といった毎日でした。肉体的な苦痛はこたえませんが、こんな生活が何時終わるのか何時抜け出せるのかという精神的な苦痛は頭から離れなくなっていました。
三橋先生の退官後、橋本先生が助教授から教授に就任され、仕事に対して分子遺伝学の要求度も更に増して来ました。年を取ってから覚えなくてはならない新学問はノイローゼになるような重圧感の毎夜でした。

井上先生のご指導で仕上げた論文も学位論文にしてもらえず、周囲の研究生達が次々に卒業して行くなかに有って、痛恨かつ焦燥の一時期でした。朝方、帰宅して数時間の睡眠後、出勤することも時々ありました。家族が私の健康を案じて夕食の弁当を研究室に届けてくれることもありました。特に下の子供(小学生5年)が仏壇の前で『お父さんの実験がうまくいきますよう』にと祈ってくれた姿が脳裏をかすめ涙を禁じえません。

◆意志あるところに道は通ずる

橋本先生より仕事の内容を緑膿菌に移るよう命ぜられ、緑膿菌を専門にされていた伊予部助教授のご指導を仰ぐようになりました。毎週、抄読会には英文の論文を数編紹介することを心がけるうちに、僅かながら他の人の論文要旨も理解出来るようになってきました。橋本教授からは相変わらず質問攻めに会い、答えに窮すると『荒木君、とても、とても』『学位にはほど遠いですよ』この言葉を何十回聞かされたことでしょう。その都度、深く落ち込みました。人間には持って生まれた能力があり仕方のないことだ。“運”、“鈍”、“根”、が必要だと己に言い聞かせ、私は“鈍”である以上、人の数倍努力すれば何とかなると“根”に徹しました。緑膿菌染色体上に存在するカナマイシン不活化酵素を支配する遺伝子とプラスミド上に存在する同一酵素産生遺伝子の関係をまとめて学位論文にさせてもらいました(昭64年、1989)。教授から十分、学位論文に価すると言ってもらい、今では研究費も支払うことなく研究室に自由に出入りさせてもらっています。

感　　謝

高校卒業の時、芽生えた夢から数えること実に25～26年の歳月は過ぎ、微生物教室に籍を置いてから15年目にして迎えた春といえます。学位を得たら留学したいと心の片隅に持ち続けていましたので、機会をみて短期間でも最先端の現実を肌で感じたいと切望しています。

医療たけに限定するのでなく、地球汚染の解決とか、動植物環境における緑膿菌の利用応用はないものか、これからが私に課せられた仕事のスタートと考えています。常に苦境の時、支えてくれたものは学位を得たいという己の欲求であり、高校時代の青臭い青春の想い出であり、生活を脱皮したい願いであったような気がします。近きにあっては上述した方々の他、名前を列記出来ないほど多くの方々の陰に陽のご支援を頂いたお蔭で目的が達せられたと感謝しています。

特に職場（佐藤病院）や家庭の多大な心の支えが有ったことを忘れることは出来ません（1989年・11月末）。

夏の大山風景